

バスケットボール競技におけるディフェンス評価法の提案と検証

コーチング科学研究領域

5009A004-6 阿部 由紀乃

研究指導教員：倉石 平准教授

I 緒言

1. 研究の背景

バスケットボール競技とは、流動的な局面変化の中に成り立つ競技である。スピーディーな攻防の切り替えによって、刻々と変化する競技特性をもつバスケットボール競技において、内山ら(2001)は「ゲーム分析は冷静にゲームの流れや内容を捉える方法」として、数多くの研究者たちがその重要性を言及している。現在、日本でもスポーツ科学が重んじられる時代にきており、倉石(2010)が「経験科学を実証の科学に変えていくのがこれからであり、しっかりとした理論に基づいたデータをしっかりと作り出すコーチが必ず勝利することとなる」と述べているように、ゲームの実態を数値化することは、勝利に不可欠であると考えられる。近代のバスケットボール競技において、ディフェンスの意義は益々増大しており、ディフェンスの優劣が勝敗に大きく影響することは明らかである。効果的なディフェンスによって得点の機会を一時的に妨げられると、プレイヤーはプレッシャーを感じてミスを犯しやすくなり、ゲーム中にそのフラストレーションが常に続けば、終盤になるに従って、相手のオフェンスを狂わせ効果的なオフェンスが機能しなくなることを期待することもできるのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、これまで数値化されて

こなかったチーム・ディフェンスについて定量的な基準に基づく、評価法を提案することである。そして今回提案する評価法を JOMO サンフラワーズの 2009 - 2010 年シーズンの 36 試合を対象に実験的に評価を行い、JOMO サンフラワーズの 2009 - 2010 年シーズンにおけるディフェンスの問題点及び課題を明確化することである。

II ディフェンスの評価基準の提案

本研究では、ゾーンディフェンスやマンツーマンディフェンス、プレスディフェンスに関わらず、ディフェンスにとって最終局面で 1 対 1 の対峙する状況がディフェンスにとって重要な局面であると捉え、各攻撃に対するディフェンスの最終局面について評価を行う。相手攻撃がシュート以外で終了した場合を最高基準値 10 点、シュートを外した場合を基準値 9 点とする。さらに失点された場合の評価基準を基準値 7 点以下に細分化し、それぞれに評価基準を設ける。そして 1 試合の全てのディフェンス評価点の合計を算出し、相手の攻撃回数で除した数値が対象試合のディフェンスの評価点となる。

III 事例研究

1. 方法

(1) 対象ゲーム

2009 - 2010 シーズンにおける JOMO サンフラワーズ(現 JX サンフラワーズ)2009

- 2010 シーズンに開催された W リーグ(レギュラーリーグ, プレーオフ/セミファイナル・ファイナル) 及び全日本総合バスケットボール選手権大会(皇后杯)の 36 試合を対象ゲームとした.

(2) 分析方法

DVD 録画された 2009 - 2010 シーズンにおける JOMO サンフラワーズの 36 試合を, 分析ソフト Eizojokey を用いて, 今回提案するディフェンス評価基準に基づき各試合のディフェンスの評価を行う.

(3) 統計処理

すべての統計処理には, SPSS 12 OJ for Windows(SPSS Japan Inc.)を使用し, Mann-Whitney の対応のない U 検定を行った.

2. 結果・考察

図 1 には, ディフェンス評価点における勝ち群(W群)と負け群(L群)の平均値を示した. 全体のディフェンス点の平均は 6.97 であり, W 群の平均値は 7.05, L 群の平均値は 6.70 であった. このことからディフェンス評価法が勝敗と関係する事が示唆される.

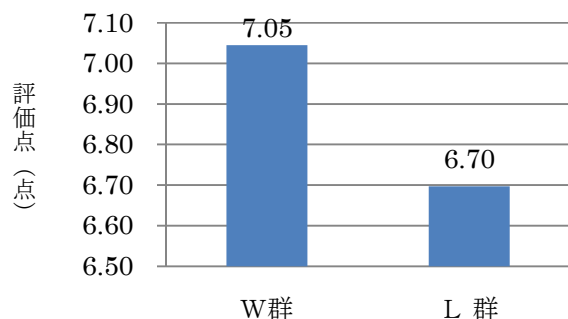


図 1 ディフェンス点における勝敗別の平均値

図 2 で基準点別に勝敗間の頻度を比較した. シュートを入れられた場合, どの評価においても L 群が高く, 相手のシュートが外れた場合の基準値 9, 10 は W 群の値が高い結果となった. L 群において, 基準値 1~4 の頻度が高いことから, マッチアップマンへのディフェンスができていないことが示唆される.

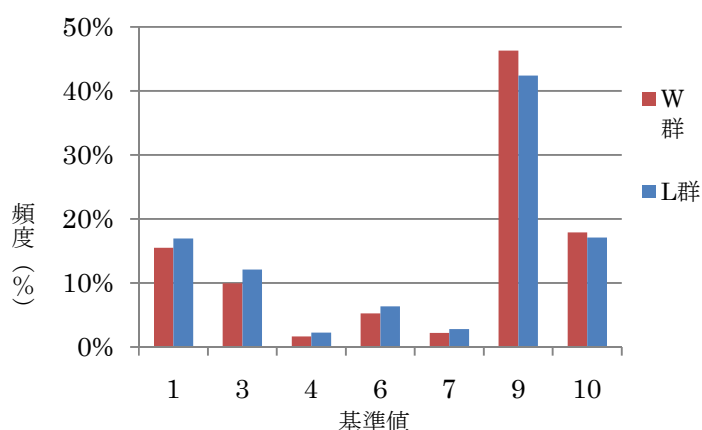


図 2 勝敗間による基準点別頻度の比較

IV まとめ

事例研究の結果, 勝敗別のディフェンス点の平均値は W 群が 7.05, L 群が 6.70 であった. JOMO サンフラワーズの全 36 試合中, 敗戦した 7 試合のうち 6 試合は平均値 6.97 よりも低い値を示していることから, このディフェンス評価法が勝敗と関係性を持つと考える. L 群は W 群に比べ, 基準値 1~4 の頻度が高く, 基準値 6~7 が低くなっていることから, 負けた試合に関して, JOMO サンフラワーズはマッチアップマンのディフェンスが出来ていなかったことが示唆された. このように今回提案したディフェンス評価法はディフェンスにおける敗因を探る手掛かりとなり, JOMO サンフラワーズにおけるディフェンス課題を発見することができた.